

87 明治11年1月6日 菊池長閑宛

第一号 明治十一年一月六日 (長閑注記)

例の如く愛度新年を迎られたるならん恐悦々々私も同様なり去
月中旬より当国の都ワシントン府に参り議院の様を見物したり
合衆国の議院と云へハ如何にも敵かなものと皆人思ふなれ共中
々左右計りもなし上院ハ人数も少き故成人敷諸事を取捌なり併
下院の方ハ代議人と云ふ奴ハ三百人計り広き堂に幾行にも並て
座る事故自ら騒かし一寸其有様を云なら先一人一生懸命声の有
らん限りに何か演舌をし居に外の奴ハ何か相談の為やら話かあ
るやらにて彼地へ往たり此地に参たり互に往来するもあり又手
を鳴して小使を召もあり 日本の茶屋にて給
仕人を呼と申し 新聞紙を読奴あり手紙
を書者あり一向誰も彼演舌を聞風ハなし尤人の聞と聞ぬハ談家
の上手下手に依なれ共聞ぬ而已ならず三四人位宛寄て話する故
彼演舌者の云ふ一も分らず余り騒々敷成と議長ハ槌を以て我机
を叩諸君静り玉ひ各座に着玉ひと云ふ暫時ハ着座すれ共矢張出
て来るなり中にハ面付の時計り入て来て直退出する奴もある様
に見得たり斯云ふたら何た合衆国の議院迎も一向詰らぬものた
と思へけれ共右ハ一寸悪い方を書たるなり大事の仕事する片ハ
矢張真事目(抹消)に遣り付るなり然し平生ハ先此様なものにて
議長たる人の骨折ハ如何計りと被思議事堂ハ世界にも稀なる程

立派な建物なり大統領の官屋敷并諸官省も不残見物したり国父
と唱られる彼ワシントン氏の墓も詣たり滞溜中ハ公使吉田氏の
家にて数度日本料理の馳走に與り大慶したり吉田氏ハ信切な人
にて自分の馬車に乗て彼地此地と見物に連行たり

御尊父様

武夫

(長閑注記2)

「明治十一年三月五日達日数五十九日

三月七日此方二号ヲ以返事同十一日郵便へ出し」